

十六五代時代亞細亞形勢圖(附圖、燕雲十六州及其附近)、十七宋金對立時代亞細亞形勢圖(附圖、金宋夏三國末年要地圖)、十八元初亞細亞形勢圖(附圖、元末群雄割據圖)、十九元代之朝鮮(半島)、二十明初亞細亞形勢圖(附圖、明初南海要地圖)、廿一歐人新地檢出時代圖、廿二李氏朝鮮、廿三明末亞細亞形勢圖(附圖、清太祖時代之滿洲)、廿四清初亞細亞形勢圖、廿五露國之亞細亞侵略、廿六英國之印度侵略(其一總督別、其二代別)、廿七清末廢亂圖、清末外國關係圖(遼東半島、膠州灣、威海衛、印藏界約、伊犁附近、香港及澳門、廣州灣、廿八日清日露兩戰役圖(附圖、日露戰役奉天會戰圖、日露戰役旅順要塞圖、日露戰役日本海大海戰圖)、廿九清末亞細亞形勢圖、三十清末支那全圖(附圖、清代北京圖、北京富國圖)、卅一西比利亞出兵及滿洲事變圖(附圖日獨戰役概見圖、青島要塞戰圖)、卅二現代亞細亞形勢圖、卅三現代東亞要圖(附圖、南京市街圖、上海市街圖、新京市街圖) *印は新たに加へたるもの * *印は改訂の著しいもの * * *は全然書き改めたもの。

の諸圖を掲げ、卷末に六四頁よりなる東洋讀史地圖解説を附けてゐるが、これも再版を増訂する所が少くない。

古代から現今に至るまでの歴史地圖であるから、これを批判することは到底私にはできない。たゞ開卷第一に氣がつくのは、自説に關することで恐縮であるが、卷首支那古地圖の内、現存の支那古地圖中最古のものと考へられる、齊阜昌の禹跡圖と華夷圖の年代が 1137 A. D. となつてゐることである。解説の禹跡圖の部

分にも、この圖碑が建てられた齊の阜昌七年は金の熙宗の天會十五年、南宋の紹興七年、西曆一一三七年に當るとある。拙稿「劉豫の齊國を中心として觀たる金宋交渉」(『滿蒙史論叢書第一』一〇八頁補註47)に於て試みた考證によれば、齊阜昌七年は金の熙宗の天會十四年、南宋の高宗の紹興六年、西曆一一三六年に相當する筈である。しかしこれは地圖の内容に關したことはない。

我々が座右に置いて始終その御厄介になるのは年表と地圖とであるが、我々はその恩になれすぎて、兎角その缺點を擧げてその便利な點を忘れ勝ちになる。本圖なども或はさういふ取扱をうけるもの、一つとなるかも知れない。私は缺點を擧げるのは悪いこととは言はないが、そのよい一面を忘れてはならないと思ふのである。多くの利用者をもつであらう本圖は、各方面の研究の進歩と、もに將來ますます成長を遂げるであらう。専門家の忠告は、和田博士の歡迎せられるところであることは、その序文に於ても言つてみられる通りである。他人のものを改訂することは、初めから書き下すよりもむづかしい。これは本圖増訂に當つて和田博士の痛感せられたこと、察せられるが、さうした憚みを該圖隨處に感ずるのは私一人ではあるまい。和田博士の勞を深く謝したいと思ふ。(昭和十六年一月、富山房發行、四六倍判、定價七圓五〇錢)(外山軍治)

東亞古文化研究

原田淑人著

ちかごろ、濱田青陵先生、梅原末治博士の論文集が相ついで上梓され、いまだ原田淑人博士の論文集が世におくられて、日本の有数の考古學者の論論文が便利に手にはいることになつたのは、まことに慶賀すべきことである。いまこゝで、それをくらべてみようとは思はないけれども、くりかへしみてみると、それぞれ學風のちがひ、そしてまた人間のちがひといふやうなものまでおのづからうかゞはれて、ことのほか感興をおぼえるしだいである。いつたい、短篇をあつめた論文集は、主題のある一冊の著述よりも、より著者に對する關心をそゝるわけであるが、原田博士の場合は特にこの感がふかい。といふのは濱田先生にしても、梅原博士にしても論文集がいくつあるから自然に著者に對する關心も各冊に分散する、それに對して原田博士の場合はこれが唯一の論文集であつて、しかも全論文がこれにおさめられてゐる、博士の全風貌がこゝにありとみて不可ないのである。もちろん、原田博士にも服飾に關する單行著述が三種まであり、古器物に關する著述も二種あり、『樂浪』、『牧羊城』、『東京城』といつた單行の報告書も別にあるが、しかし、これらの業績はやはり、それぞれに短篇の論文にも反映してゐるのであつて、この意味からも、まずまず、この論文集が原田博士の全貌をつたへて誤らないものだといふことがいへる。

年月でいふと、明治四十三年の『唐代女子化粧考』が最初で、昭和十四年の『正倉院御物を通じて觀たる東西文化の交渉』でおはつてゐる。すべて四十八篇。そのうちには、漢唐の服飾、風俗を論

じたものあり、正倉院の御物を研究したものであり、それから出發して各種の文様意匠を考察したものであり、ついでにはガラス、釉の問題、漢絹の問題などが論ぜられてゐる。少しかはつたものとしては漢代の木棺や、耳杯、人物畫、漆器の文字の解釋したものがあり、鐵器時代の終末を秦末漢初と斷じたもの、鐘鐻金人を躍坐・擧手・有鱗・胡服と推したもので、さらに古式銅鼓の年代を西紀一二世紀に考定したもの、南北朝古陶と新羅燒・視部土器との關係を論じたもの、また鴨尾、古代管札、渤海の佛像に關するものなどがある。著者三十數年間の勞作であるからには、その取材に變化あること、もとより當然であるが、それにもかゝらず、その間おのづから經となり緯となつて、これをつらぬくものがみられる。それはいふまでもなく、最初の論文にせめされた服飾の研究と、最後の論文にあらはれた東西文化の交渉とである。この一貫して動搖をみない著者純一の態度に對しては、ふかい尊敬の念を禁ずることができない。

また研究の方法も、こまかくみればいくらか違ひもあるが、遺物を文獻で證明し、文獻を遺物で解釋しようとする遺物・文獻二本立の根本態度は終始一貫してゐる。遺物と文獻とを兩々相持して、これが調和をうまくとつてゆくといふことは、なかなか、むつかしいことである。いふだけはやさしく、誰も賛成するが、實行は至つて困難である。原田博士の諸勞作は、とにかく、その困難を克服して、これだけの實效をあげられたところに、博士獨特の重みがありといへようか。

黙々として、數十年間一貫した主題の下に、一貫した研究方法でつらぬかれた著者の眞學な學究的態度は、いまこの書物を手にして、あらためてわれわれ後學の發奮をうながすものがある。敢へて東洋の考古學に專念する人にかぎらず、ひろく諸學の士に一讀をすゝめたいとおもふ。(塵右室刊行會刊、菊版五四二頁圖版八一、定價七・五〇)(水野清一)

古銅器形態の考古學的研究

梅原末治著

能動的な發掘調査の方法と解き離しがたく結びついた近代の考古學研究をしばらく措くならば、古代の遺物に對して考古學的な解釋を試みることは、支那において先づはじめられたといふも過言ではあるまい。われわれは既に宋代において古銅器に關する著錄の類を見るのであつて、今日ひとり支那學者のみならず、世界の學究の關心をこゝにあつてゐることの淵源の古きを知るのである。

かくの如く古き研究の歴史を有する支那古銅器は、世界の考古學界において、また他の視點より見ても特殊な地位を占めてゐる。即ち考古學上における年代決定の規準として、普通に用ひられる利器または容器による區分のうち、容器としてはいづれの地においても土器によることが多いのに對して、支那考古學にあつては、史前の彩文土器から漢陶に至る永い期間を、土器の推移によつて鮮明する方法は未だ成功してゐない。かへつて、今日ほ明

らかにせられてゐるこの間における青銅器の變遷觀を、これに代るものとして有するのであつた。支那考古學上における古銅器研究の價値の特に大なる所以である。

しかしまた、今日われわれの聞知せる支那古銅器の變遷觀なるものも、その永き傳統にもかゝはらず金文に對する特殊な關心に驅されて、幾多の僞銘の器を無批判に集載した中國人の著錄や、それらに基づいて進められた方氏一派の研究を是正して、眞に據るべき學說の體系とするには不十分なるものであることは否みがない。

こゝにおいて先に戰國式銅器の集大成を終へられた著者が、邁つて所謂三代の古銅器に關する東方文化研究所における研究成果の一部を公にせられたことは、特に著者が實査せられた確實なる資料のみによつて、——しかもそれは極めて多數に上る——研究を進められたといふ一事のみを以てしても、はじめて支那古銅器に關する信據すべき著作を得たといふ學界共通の喜びをおほふことが出来ない。

さて著者が本研究に際して使用せられた資料の性質は、一部に安陽殷墟の出土と目ざるゝものをはじめとし、山西李峪村・河南新鄭・安徽壽縣・河南洛陽その他の地域的一括遺物を含んでゐるが、なほ多くは發見の時と所とを異にせるいはゞ遊離資料ともいふべきものであつた。従つてこれが研究は必然的に、發掘に重きを置く考古學的研究の方法に對して、純粹な形式學的研究を以て一貫せられ、その處理において方法論的にも一の典型を展示せ